

# 舞 とうん

VOL.68



aya

アングル

風を感じにいらっしゃい……………松野町観光公社／隅田 深雪…………… 1

◎◎ 『新しい風を起こそう』

新しい風が吹いていく……………魚島村／中村 一人…………… 2

「木地師になる」……………久万町／甲斐 義裕…………… 4

土に触って生きていきたい……………五十崎町／越智 環…………… 6

進化できる田舎の花屋目指して……………野村町／和気 十三…………… 8

明日のまちづくりとセンターの役割を考える（まちづくり委員会から）……………10

媛のくにフラッシュ〈大三島町〉・アンケート結果……………15

キラリ光るまち 「訪れる人に安らぎを、去りゆく人に幸せを」…  
筑後吉井の小さな美術館めぐり実行委員会事務局長／山崎 昇三…………… 16

論壇—まちづくり—

もっと知りたい「ソフトのまちづくり」…………… 長野県飯田市／高橋 寛治…………… 18

MY TOWN うおっちんぐ 歩キ目デス&足ラテス

三瓶町蔵貫編……………岡崎 直司…………… 20

まちづくり最前線

「ローズ館」奮闘記 ～加工室編～…………… 吉海町／山口真佐美…………… 22

研究員レポート

回想、この一年……………森田 浩二…………… 24

「交流」の大切さを学ぶ ～九州ツーリズム大学～…………… 橋岡 勝一…………… 26

研究員卒業レポート

『201X年』……………藤田 享…………… 28

Information まちセンからのお知らせ…………… 30

特集

新しい風を起こそう

4月、新しい息吹が感じられるときです。やさしい春の風も吹いてきます。風に吹かれると何となく心が浮き立ってくるように感じられるから不思議ですね。

台風のような強風は困りものですが、風は外からだけでなく内からも新陳代謝を促してくれます。いくら住みやすかったり恵まれている地域でも、何の变化（風）もなければきっと魅力の乏しい地域になってしまうことでしょう。風が吹いて初めて地域のよさがわかったり、悪いところ、弱いところが分かったりするのです。

今号は、そういう風に視点を当てて、特に若い人たちが起こしている（であろう）風、新しいものに挑戦する力を特集してみました。

それぞれの地域で、若い力は活動しています。新しい風を起こしています。

（編集者 三好）

表紙の言葉

街では高層ビル・マンションの谷間に、こいのぼりは遠のいて、寂しさを感じます。

郊外に出ると、ダムや川に集合したこいのぼりが爽快に泳いでいます。

旅先にも、このような景観を目にすると、旅の内容も又一つ、大きく膨らみます。

大分県竹田市の郊外に出た時、いい風を感じました。棚田の広がる見晴らしの良い所に、こいのぼりが泳いでいました。その色あいが実に鮮やかで、鮮明に今でも残っています。

柳原 あや子



# アングル

私が住んでいます松野町目黒は、愛媛県と高知県の県境で、車で五分も走れば高知県西土佐村です。西は滑床山系、東は黒尊の山々を見ることが出来ます。朝日に染まる山々や雲、川霧に煙る山里と自然の美しさを満喫しています。

こんな贅沢な生活が出来るのも、今年の夏に同居人となった、犬の「くまこ」のお陰に思っています。目覚し時計の如く、眠い目を擦りながら日の出と共に散歩をするようになってから、自然の移ろいの美しさに改めて感動する毎日です。正に私のパワーの源となっています。

私が観光に携る者として、「お客様が求めているものは？」は、常に考えなくてはいけない大きなテーマです。自然がいつぱいの中で生活している今、私の中で漠然と考えていた「四国にテーマパークはいらない」の考えは、確信となりつつあります。どんなに厳しい冬でも季節が巡れば、梅のつぼみもふくらみ、田の畦も薄緑色になり山の新芽も色づいてきます。春の足音と共に、お遍路さんの鈴の音が響き、四国路は一気に賑やかになります。自然の変化は何にも勝る、新しい風、パワーです。

生活のテンポのスピードがますます速くな

## 風を感じにいらっしやい



森の国ホテル

私ども滑床溪谷「森の国ホテル」も、今年で満十周年を迎えます。四月二日にはリニューアルオープンしましてお客様をお迎えます。滑床溪谷のロケーションの中、多くの方々にご愛顧をいただいておりますが、今年度を原点と捉え、滑床の環境保全に改めて取り組んでいきたいと思っております。ごみ処理の問題、客室用品の品質、食材の厳選等、お客様をお迎える為の改善点を一つずつ実行していきたいと思っております。

先輩の方々には昔懐かしい子ども頃の思い出を、若い方々にはお父さんお母さんに聞いた体験を、子ども達には観たことも無い田舎の暮らしを、松野町で体験してもらいましょう。

お料理も地元のおばあちゃん・お母さん達の自慢料理、数々の食材の使い方をホテルの料理の一品に加える事にしましょう。滑床溪谷の水の流れを耳にしながら、露天風呂にのんびりと入れば、きつとストレスで張り詰めた神経も「癒される」と思います。

あなたの「新しい風」を感じに松野町にいらっしやいませんか！



就松野町観光公社

隅田 深雪

# 新しい風が吹いていく

魚島村 中村一人



愛知県豊橋市より高井神島に引越してきてもう七ヶ月が過ぎようとしている。比較的大きな病院で看護師をしていたが、地方での地域医療にかかりたくてインターンをしてきた。

面接で魚島に来たときには、天気も悪く周りには島影も見えず、まるで「絶海の孤島」の様に感じて正直不安になったが、島を見学してみると思いの外福祉センターなど整えられており、その整備ぶりに驚き、不安な気持ちなど消えていた。給料も以前よりかなり低くなり、身よりのない土地へ行くことに妻の反対がなにか心配もしたが、僻地医療への自分の考えを話し合っていたため、魚島での生活に心配はしても反対されることはなかった。妻も看護婦だったので理解してくれたのかもしれない。

現在診療所で、看護師・事務・福祉センターでの機能訓練を担当し日々働いて

いるが、実際に島で暮らし、働き始めた頃は驚くばかりの毎日だった。

## 島での生活は驚きの毎日

まず、島の子どもの暮らしぶりに驚いた。島を歩いていると子どもたちが皆、大きな声で挨拶をしていく。

私も小学校の頃など「挨拶をしましよーう」などとよく先生に言われた覚えがある。もちろん今でも、どこかの学校でもそういった指導はされているだろうがこちらに来るまで、知らない子どもにも挨拶されるようなことなど滅多にないことだった。

私にも一歳と五歳の子どもがいる。上の子は私と一緒に魚島の保育園に通っているが、顔を合わせる大人たちが皆子どもに声をかけてくれる。下の子に至っては、島の老人たちがまるで本当の孫のように接してくれている。



「子どもたちがのびのびと育ち、それを周りの大人たちが見守る」そんな島の生活が感じられ、妻共々驚いていた。

## お年よりも元気です

また、仕事の上で老人たちと接する機会が多いが、島の老人たちにもずいぶん驚かされた。

私が病院勤めで不健康な寝たきり老人や痴呆老人を多く見過ぎ、固定観念があったかもしれないが、社会の中でも、現役で元気な老人たちばかりなのだ。

もちろん糖尿や腰痛その他諸々の持病を持つてはいるものの、とにかく元気。ここでは老人（高齢者）が一方的に守られる側ではなく、社会の中でりっぱにその役割の一部を担っている。

都市部では、いや少なくとも私が勤めていた病院では（病院という環境もあるが）、老人は一方的に守られる側であり

## 新しい風を起こそう

また、社会から阻害された存在であった。誰も面会に來ない老人、家族にだまされ入院させられる老人、果ては遺体の引き取りを拒否される老人。

完全に社会からは阻害され、他の病院や施設でも似たような話はよく聞いた。しかし、そんなことはここではみじんも感じられない。

高齢者が実際に社会の中で活躍し、助け合い、またさらに若い者たちがそれを助ける。

「古き良き時代」と言うのだろうか（古い時代を知らない私が言うのもおかしいかもしれないが）、そんな生活がここにはあるような気がする。

最近よく思い出すことがある、以前勤めていた病院で老人たちの社会復帰や地域社会へのかかわりが、精神的なケアにもなると、いろいろなイベントや訓練、近隣地域の住民たちとのふれあいなどを行うことで「少しでも…」と苦心した事。

また、小学校の通学路などの商店や民家に子供たちの立ち寄り所？などがあつた事。

### 時代の先端を行く魚島村

都市部が苦勞して実現しよう、取り戻そうとしている生活がここでは当たり前前

のように営まれている。

ある意味、時代の先端を行っているのではないだろうか？

しかし、ニュースやいろいろな話を聞くと、地方が都市部の生活をそのまま持つてくるのに躍起になっているように感じることもある。

魚島で生活していてそういった感じを受けるとはいいが、それでもよく島の人たちに通勤のこと・買い物のことを「向こうと比べると不便だろー」と言われたが、私自身、それほど「不便だ」と思ったことはない。

今まで、車を運転して二・三十分かけて通勤していたが、今は船で十分。買い物にしても、車で二・三日分まとめ買いしていた物を倍の一週間分になった程度。



中村さんが勤めている診療所

ちょっとした買った買い物（服や専門的な品物）にしても通販がある。

もちろん、生活していく上で利便性を考えると、ある程度の開発や地域整備は必要だと思うが、何より都市部が苦勞して実現しようとしても、なかなか実現できないでいる生活がここにはある。

都市部の生活を追いかけるのではなく、もう逆に都市部から追いかけてられているように感じる。

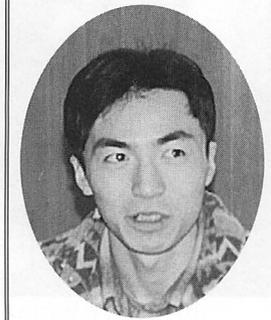
新しい風は「吹いてくる」のではなく、こちらから「吹いている」のでは？



魚島港風景

# 「木地師になる」

久万町 甲斐義裕



## 山に住む

「シーン」と静かな空気の中、雪がはらはらと舞って、真っ白な世界が窓の外に広がっています。聞こえる音は、薪ストーブのパチパチという音と、轆轤ろくろの木を削る「シュー」という音だけ……。

私の住んでいる所は、久万町の町から十キロの所。標高六百二十メートルの山の中です。林に囲まれた一軒家で、鳥のさえずりを聞き、季節ごとに色を変える山々を見ながら生活しています。

私は、父の後を継いで「木地師」という仕事をしています。木地師というのは、木を轆轤ろくろという機械に取り付け、高速回転させながら轆轤ろくろかんを手で持って手の感覚で削り、器に仕上げる仕事です。木を削って仕上げていくと、木目がきれいで出てきて、その瞬間がすごく楽しいです。

使う木は広葉樹が主で、樺ほや・檜ひのき・桜さくら・楓かえで・朴はちなど、たくさん種類の樹種を使います。木によって木肌の色、香り、堅さ、手触りが違い、それぞれ個性があります。どの木も厳しい自然の中で生きてきたのに、やさしく、ぬくもりがあり、私は木のそんなところに惹かれます。

## 都会での生活

私が真剣に木地師の仕事をやろうと思ったのは、二十才の時でした。

その頃は、松山で浄化槽を設置する会社に勤めていました。新しく家や会社が建つ前の現場に行き、シヨベルカーやスコップで地面に穴を掘り、浄化槽を設置してまた埋めて……、ということを繰り返す毎日でした。

私がこの仕事をしていたのは、この仕事が好き“というよりは、”都会で生活してみたい“というそれだけの気持ち

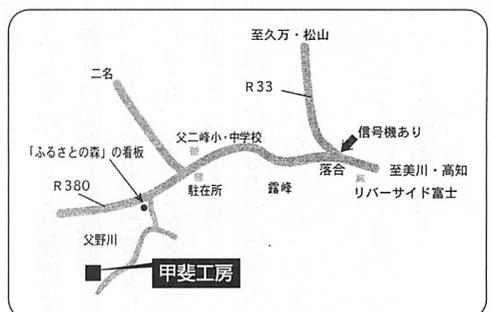
からでした。

松山での生活は、山の中で生活してきた私にとって、すごく楽しいものでした。いろいろな人との出会いがあつたり、お金さえあればいつでも欲しいものは手に入り、夜になると、友達と街に遊びに出ました。「街には何でもあるなあ」と思いました。

松山に出てきて半年ほど過ぎたある日の朝、私は布団から出られなくなってしまうました。会社を休み、病院へ行くと、「過労で肝臓が悪くなっている。」と言われてしまいました。

不慣れた仕事だったのと、バランスの悪い食生活、友達と夜遅くまで遊んだりの不規則な生活……、といういろいろな要因が考えられました。

その時には、中途半端な自分が見えて「一体、何やってんだろ。」と自責の念に駆られると同時に、「自分が本当にや



## 新しい風を起こそう

りたいことは何だろうか？」と考えるようになりました。

### 悩みながらの毎日

浄化槽の仕事をやめた後、家に戻って静養しながら家の手伝いをしました。畑仕事・山仕事・薪割り・木工と、少しずつ山での生活を始めました。

最初は、畑仕事・山仕事・薪割りなどをしながら、「こんなしんどい事やって、一体何になるんだらう。全然お金にもならないし。」と思い悩みました。

でも、三か月ほどこれらの仕事をやって、いろんな成果が出てきました。

畑仕事は土を耕し、種や苗を植え、育てた野菜が実をつけて食卓に並び、それを食べたときのうれしかった事。山仕事では、木工で使う木を山から運び出し、板にしたり器にしたり、生活の道具を作り、自分で使って感激した事。薪割りは、割って積んでおいた薪で風呂を沸かしたり、冬になり、ストーブの燃料として使うことが出来た事など、働いてきた成果が出てきたのです。



優しいぬくもりのある甲斐さんの作品



つまり『生きる活動』なんだなあ。」と思えるようになりました。

### 木地師として生きる

自然から生まれるものはすべてが本物。

その時私は、「これらの仕事はお金にはつながらないけど、野菜も木も薪も生活に必要なもの。これらを作ることには、『生活』

私は松山にいた頃、「街には何でもある。」と思っていただけ、水や空気に始まり、一体本物はいくつあるのだろうか？と思うようになりました。

家に帰って半年が過ぎ、二十才になった時、私は木地師になろうと思いはじめました。

木を使って本物の木の香り、手触り、やさしさを感じられる器、使う人が楽しくなる器を作りたいと思ひ、父の後を継いで木地師になる決心をしたのです。

九州で二年間修行をさせていただき、こちらに帰ってきて四年が経ちました。

これからの私の夢は、技術を磨き、木が生きてきた年数使える器を作っていくこと、そして、自分が使った分の木を植えて山を自然に戻していくことです。



甲斐工房

# 土に触って生きていきたい

五十崎町 越智 環



昨年の夏、十年近い東京での都会生活に別れを告げて故郷愛媛にUターンしました。現在は喜多郡五十崎町の御祓（みそぎ）地区に入り、平飼養鶏の準備を始めています。

## きつかけ

Uターンのきつかけは、持病のアトピーが大爆発してしまったこと。東京では漫画家のアシスタントやイラストなどの仕事をしていたのですが、生活が昼夜逆転してしまったりと体に悪いことばかり。都会の汚れて乾燥した空気やストレスも影響したのだと思います。お化けのように顔が真っ赤にはれあがつてしまい外出もままならなくなると、体も心も都会についていけないシンドイ自分を認めざるを得ませんでした。「よく決心したね」と感心されますが、私の場合は切羽詰った選択だったわけです。

## 土への憧れ

畑を作りたい、土に触って生きていきたいという思いは昔からあったのですが、それが強くなったのは三十歳を過ぎた頃からでした。「老いる」ことを考えたとき、東京の街で歳をとってゆく自分の姿をイメージできないのです。それでも少しでも「土」に近づけないかと、有機野菜を販売する八百屋で働き始めました。

## 半年後、

千葉県鴨川市のインターン農家の方と知り合い、一年間そこで研修



ヒヨコを育てるためのビニールハウス作り

させてもらいました。

その農家が平飼養鶏をしていたのです。ニワトリにエサをやる、卵を集めて拭く、出荷、配達する、

ヒヨコを育てる、こんな農業だったら自分でも出来るんじゃないかと思いました。また鴨川には東京からの移住者が多く、みんな個性的な思想を持って生活をしているので、良い刺激になりました。

## 土地を探す

東京で出会ったパートナーと二人で愛媛に戻り、まずは肱川町にある農業研修塾に入りました。一年間ここで研修すれば地元で農地を斡旋してもらえます。しかしここの塾長と私のパートナーとの折り合いが悪くなり、結局二か月で辞めざるを得ませんでした。就農の際一番大変な農地探しですがフリダシに戻ってしまったのです。

私達は南予地方が気に入っていたので



## 新しい風を起こそう



やっと見つけた農地

（最近では西予と呼ぶようですが）肱川町を起点にした周辺の市町村を走り回って農地探しを始めました。農業委員会を始め、農協、農業会議、農業普及センター、農業大学校、と「農」のつく機関は片っ端から訪ねましたが、最初はなかなか役立つ情報は得られませんでした。それでもあちこちに顔を出すうちに少しずつ情報が集まり、最終的には四か月で十四箇所土地を見ることが出来ました。

しかし、案内してくれた役場の人の「何か悪い条件がある土地だから空いてい

るんだと思  
ったほうが  
良い。」と  
いう言葉ど  
おりで、自  
分達の理想  
の条件の土  
地にはなか  
なか巡り合  
うことが出  
来ませんでした。

今回見た中で一番多かったのが休耕地、次いで使っていない豚舎、荒れ果てたパイロットファーム、鉄塔の建っている畑、ものすごい山の上の栗畑七町歩なんていう土地も見ました。

私たちは有精卵にする為にオンドリも含めてニワトリを飼うので、早朝三時四時から鳴き始めるトリの事を考えると、ある程度人家から離れた場所でないといけません。平飼い養鶏の場合、まず悪臭がすることはありませんが、匂い、ホコリも気になることです。また、ニワトリを飼う土地はあっても近くに自分達の住む家が見つからなかったり、貸しても

あいまいな情報に振り回されたり、役場



プリマスロック種のヒヨコ

からストップがかかったりと土地探しは難航しましたが、中には親身になって地元の情報を見せてくれた方たちもいました（この誌面を借りてお礼申し上げます）。これからは私達のようなタイプの百姓志願者が増えていく時代だと思いますが、農村に縁もツテもない人間が農地を探して地域に入っていくのは至難の業です。私達は幸運だったと思いますが、これだけ農業の盛んな南予のこと。将来、地域と地域を求める人とのパイプがもう少し滑らかになっていけばと願います。

### 御祓（みそぎ）に入る

土地探しを始めて三か月目、五十崎町の「みそぎのいろいろ話す会」を訪ね、棚田で無農薬米作りをしている季羽さんと出会って私達の農地探しも終わることになりました。季羽さんの紹介で山の中のパイロットファームを貸してもらえ、ことになり、住む家も見つけてもらいました。

御祓は周りを山に囲まれた昔ながらの小さな部落ですが、季羽さんを始め多くの方が温かく迎えてくださり応援してくれます。先日初めてのヒヨコも入りしました。私達の農業は、始まったばかりです。



## 新しい風を起こそう

たところもあつたのですが、それからは真剣に、大切に扱うようになっていきました。花は自分の生活を守ってくれる大切な商品であり、武器でもあるのですから。

次に、お客様に花を売ると言うのは、夢を売ること。出来上がった花束を見て「わあ、うれしい。かわいい。」と、お客様が思っていた以上の喜びを提供できなかったら花屋ではないのです。まだまだ生花は高価なイメージがあるし、食料品のように生活に必要不可欠なものでもありません。だからこそ、来てくださったお客様に感謝してプライス、技術などのいろんな面で満足していただきたいと思うようになってきました。

### 花屋として独立

それから、一緒に仕事を手伝ってくれる人生のパートナーにも巡り合い、結婚を期に独立して、二人の理想の花屋（花曜日）を開くことになりました。余談ですが、この時資金もすくない私たちを大いに助けてくれたのが、野村町が出した、若者定住



爽やかな春の風が吹いてきそうな店先

政策のなかの空き店舗活用家賃補助でした。こういう町民のためになる政策や条例をもっともつとうち立ててもらって、若者も残りたいと思う、魅力ある町にしてもらいたいと強く思います。

開店してからは、まずまずの滑り出しです。たくさんのお客様にも来ていただきました。ありがたい限りです。しかし、この小さい町だけで商売をしていくだけでは何の進展もありません。そこで考えたのが全国生花配送組織に加盟することです。そうすれば、外部からの注文もはいるし、より地元のお客様のニーズにも応えられます。次にHP（ホームページ）の作成。そして、インターネットを媒介とした全国生花店のネットワークにも加盟しました。HPを作った頃は、「さあ、これで注文がドンドン入るぞ！」とわくわくして毎日のようにパソコンを見ていましたが、何の反応もなく、「実際はこんなものかな」って諦め気分にもなりませんでした。でも最近、当店のHPを見た東京の方が大変気に入ってくださり、ウエディングブーケの注文が入りました。愛媛の片田舎にいても、全国いや、世界中の誰かがHPを見て、ましてやご注文をくださるなんてこんなにうれしいことはないなって心から思いました。このように、

少しずつではありますが、市場を広げる努力をしております。

### 小売店で頑張る

今、野村町（その他の町村も同じだと思います）が抱えている問題ですが、人の足が近くの小売店より、遠くの大音量の店に流れていることです。商品の種類、値段、利便性、ただ物を買うということにおいては、小売店はないと思います。しかし、専門小売店も大型店に負けないところがあります。例えば人とのふれあい。何度も来てくださるお客様にはサービスやおまけもしてあげたくありませんし、交渉によってはお値段もぎりぎりまで安くできます。センスと質の良さだつて負けないと思います。後はお客さんが来たくなる店づくりをしていけば、量販店にも負けないのではないのでしょうか。（偉そうに言う前に自分の店をもっともつと変えていかなければ。店内の掃除、観葉植物を枯らすようじゃダメだな。）

これから時代が進んで行くにつれ、生花店の形もいろんな風にかわってくると思います。流行も変わります。現状に満足することなく、常にアンテナを張り進化できる田舎の花屋でありたいと思います。

# 明日のまちづくりとセンターの役割を考える

新しい世紀になり、まちづくりセンターも「えひめ地域政策研究センターまちづくり活動部門」という名前になって1年が過ぎた。

このほど、センター事業への助言をいただくまちづくり委員会の初めての会を開催し、これからの『まちづくり』について、問題点や展望、さらにはセンターのあり方について、委員の皆さんにお話しいただいた。



原田 満範  
松山大学経営学部教授



前原 和子  
マイントピアを楽しく育てる会  
(新暦浜市)



森 正康  
松山東雲短期大学助教授



森原 直子  
詩人  
(松山市)

河島 昭和五十八年位まで、地域という言葉さえ私の頭にはありませんでした。それがひょんなところでつまずきまして、五十崎町の小田川改修の関係で動き始めて、その時初めて地域ということを認識しました。何事も地域という物差しで見

岡崎 私は宇和町に住んでいて、日頃はウオッチングをテーマとして、いろんな仕事をしているような状況です。いろんな地域のもどかしさとかそれを感じているのですが、こういうセンターがあることの知名度がまだまだ低いので、うまく結び付いてリンクしていくようになればいいかなと、思います。

## ◆まちづくりについて思うこと



岡崎 直司  
えひめ路上観察友の会  
(宇和町)



河島 登紀  
みそぎのいろいろ話す会  
(五十崎町)

讚岐 まちづくりセンターが出来たときから、いろんな形で関わってきたんです。だから何か地域づくりの関係で出来るとしたら石を投げるのかなと。波を立てて、その波を受けられるかどうかは、もう相手次第なんです。とにかくいろいろやってみて、それにつまずく人が一人でも二人でも出来たら、充分に意義はあるんじゃないかなと。何となくそう思っています。

だから何か地域づくりの関係で出来るとしたら石を投げるのかなと。波を立てて、その波を受けられるかどうかは、もう相手次第なんです。とにかくいろいろやってみて、それにつまずく人が一人でも二人でも出来たら、充分に意義はあるんじゃないかなと。何となくそう思っています。



讚岐 幸治  
愛媛大学教育学部教授



永江 孝子  
南海放送アナウンサー



山口真佐美  
 (布伊予大島ローズ館館長  
 (吉海町))



若松 進一  
 21世紀えひめニューロンイブ「ムーブ」  
 (双海町))

が、「地域」って考えようによっては一  
 ひとりが舞台俳優になって、自分の持ち  
 味を発揮していける舞台みたいなものだ  
 という感じがしているんです。一人ひと  
 りが自分を演じることができると、そう  
 いう舞台を作っていくのが「まちづくり」  
 ですかね。そういう風に思うんですけど。  
 永江 もう十年、年がら年中旅をしてい  
 ます。まちづくりというのは自分自身が  
 実践したこともありませんが、いろんな  
 村とか町へ伺って、その街の空気とか  
 雰囲気っていうのはいろいろ感じてまい  
 りました。それは何だろうって考えなが  
 ら歩き回っているんですが、やっぱり住  
 んでいる人の問題なんですよ。先程来、  
 皆さんがまちづくりは人づくりだとおっ  
 しゃっていましたけれども、私特に肌で  
 感じているわけなんです。  
 原田 市町村のあり方について勉強して  
 いる中で思うのは、みんな作ることに、新  
 しいものを始めることには大変熱心でや  
 る気があるが、残されたり、捨てられた

りする部分のケアが出来ていない。ビル  
 ドすればスクラップが出来る、そのスク  
 ラップについてどうするかということ  
 についての配慮が少したりない部分があ  
 る。このことがいろんな活性化の一つの  
 ネットクになつてる部分があるのかなとい  
 うことです。

前原 まちづくりに関わったのは、平成  
 五年ぐらいからです。その中で、新居浜  
 市には粒になる人はいっぱいいるなどい  
 うことを実感しております。でもそれが  
 繋がらないと言うのが現状かなと思つて  
 もいます。

まちづくりというのは、地域に住む人  
 達がどのような生き方をその町でするか、  
 最後にはどのような死に方をするかにも  
 なつてくると思いますので、そういう、  
 将来を通じてこの町でどういう生き方を  
 したいんだ、死に方をしたいんだとい  
 うような話になると思うんです。

森 今、丹原町に住んでおります。いわ  
 ゆるトトロがいるところに住みたいなど  
 というような事で田舎にこもっていますが、  
 残念ながら丹原も森の精が死んでトトロ  
 も住めなくなり、ちょっと困つたと思  
 っています。

最近のまちづくりというのは、確かに  
 こう、進んではきたんですが、何かちよ

つと行政が先行しすぎているというか、  
 どこも行政の独り言になってしまつてい  
 るところばかりが見えてくると。こうい  
 うのをもうちょっとうまく出来ないもん  
 かと思つています。

森原 まちづくりについて感じているこ  
 とを言いますと、地域の温度差というの  
 をとても感じます。熱心な地域は、皆さ  
 んのまちづくりに対する熱意が伝わって  
 きます。

その地域差をどうやって埋めていくか  
 ということですが、自分達だけが盛り上  
 がるんじゃないかと、もつと外へ向かつて  
 繋げていくことが出来たらいいんじゃない  
 かなという気がしています。

山口 私が多分まちづくりという関わり  
 一番短いんじゃないかと思うんですが、  
 九九年九月にインターンで東京から入つて  
 きました。

で、今一生懸命やっているのが第三セ  
 クターを繋ごう運動、頑張れインターンと  
 かやっています。

若松 地域の自立に向けてどうしたらいい  
 のかという事を、その街の誰が仕掛け  
 ていくか大変なこと。やったらやっただ  
 言われるし、やらなかったらやらなかつ  
 たで言われる本当に大変です。だけど地  
 域は立ち止まることは出来ないんです。





合わせて考えてくれるんだろうと思いませんね。でもそこまでしなないと雑誌の意味がないし、出す意味がないと思うんですよ。それじゃあ、どんな方法があるのかというと、こういう風に地道に出しつづけるしかないんだという思いを伝えるために、読む側を引っ掛ける方法をもうちよつとうまく考えないとやっぱり大人しすぎる、お行儀が良すぎるのかな。

森 まちづくりのあり方というのが専門化しすぎちゃってる、全体の見える状況でなくなってしまうてる。それをもっとトータルに関連させていかなきゃいけない。それと、市町村から出てる情報という

のは大体毎年毎月同じなんですよ。だからせて新しい発見があるようなことをもうちよつと何かこう出せないのかなあ。行政以外のものをここで把握して載せることに意義があるんじゃないでしょうかねえ。

永江 ターゲットがはっきりしていないなあって気がしています。いろんな事業に対してどんなアプローチが必要か、それを明確化することによってやり方が決まるのではないか、と思います。

河島 イベントボックスなんかもきれいにまとまっていますよね。それがお役所だと思えます。これはこれでまたいいんですけれど、センターが出来たのでちよつと行政とは一歩ずれたというか、本言うとだいたいぶずれて欲しいんですけれども、ずれたところで頑張つて欲しいんですね。

讃岐 『舞たうん』は個人にターゲットを絞っていかないと。どれだけ人を引き上げたかが、『舞たうん』の評価ではないでしょうか。

事務局 先程からのご意見は非常に耳が痛いんですけど、『舞たうん』と『イベントボックス』は、性格が違います。今度『イベントボックス』のデータをホームページに入れて毎月更新していこうと

いう考えもあります。

いずれにしても、委託を受けてやっているのに、金銭的な制約もあつたりして、非常につらいところがあります。その中で、せめて自分達が納得いくように努力して展開していこうと考えていますので、また教えていただけたらと思います。

原田 ホームページというのはピンポイントしか見にいけませんから、隣を見つて事がないんですよ。ある地域を見るついでに隣も、というのがないんです。こは心に留めとかなないと。

#### ◆これからのセンターの役割

事務局 最後に、センターの役割というか、まちづくり部門というのは活動している方の応援団、スタッフとしてどうお手伝いできるかという線で基本的にはいきたと思っています。もう一つは、研究センターで企画部門と一緒になった訳ですが、それからの方向性でヒントになることがあればせつかくの機会ですでお聞きしたいと思います。

若松 皆さんの意見を聞いてみると、いい事はいっぱいあるんですけども、「いい事」と「できる事」は、ほくは違うと思うんです。このスタッフの中でできる事をやっていく、という事を考えていか

ないと。

今まではまちづくりというのは、羅針盤と海図を持たない旅であったと思っ  
ています。でも初めて羅針盤と海図を作る  
運動とがダブってきたと思うので、そう  
いう風なところを、考えたことをやって  
いかなければいけないのかなあと思つたり  
します。

原田 ここが何か実行するところじゃな  
いんですよね。そういう問題を指摘す  
ることが仕事であつて、ここが仕事する  
所じゃないんじゃないかと思ふんですね。  
機関車としますとね、この機関車は生産  
部の成功例しか入っていないんですよ。  
うまくいつてる所とうまくいつていない  
所と両方のことを見せてやることによつ  
てはじめて、政策研究センターの仕事に  
なるんじゃないですか。

特にいい政策だつたかそうでなかった  
かということを示すのが、この財団の  
仕事じゃないんでしょうか。

前原 行政と市民の活動レベルの間に立  
つところがあるんじゃないかな。調整機  
能を持てる組織なり人なりが、地域にい  
てくれると非常に心強いですね。その組  
織なり人なりを育てるときにセンターが  
ちよつと手を貸してくださるとすくく助  
かるなというのは思います。

河島 地域で意識していないけれど専門  
的なあるいは見方によつては大事だとい  
うものの掘り起こし。それが地元の人つ  
てわからないんですよね。センターとか、  
そういう議論をしていく人としてピックア  
ップしてもらつたら。それと開発イコー  
ル何もしないこと、手を入れないことが  
開発だよと分かるようになる、分からせ  
るところがあつたらいいと思ふんですよ。

岡崎 うちの地区にアベマキという大き  
な木があるんですよ。それはずっとクヌ  
ギだと思われていたんですが調べてみる  
とアベマキという特殊な木で、四国で一  
番大きかつたというのが分かつたつてい  
うのがありました。よその目も大事だけ  
れど、専門家の目も。そんなところをゲ  
リラ的にこのセンターが処理してくれた  
ら嬉しいですね。それも方法論として。

山口 「町おこし人情報」とか「イター  
ンUターン頑張つてます情報」、あるいは  
イターナーのリストなんかつくれないで  
しょうか。

森 センターの機能的な問題なんですけ  
ど、今後の市町村合併の話との関係があ  
りますよね。合併しちゃうばかなり中央  
集権的な体制を敷かなくてはいけなくな  
りますよね。そうすると落ちてくること  
があります。だから逆にいえば、その

辺のところのフォローをセンターとして  
はやっていくべきじゃないかなという風  
に思いますね。

前原 ただ、合併前に市町村が持つてい  
る資源なり、人材なりをもう一回見直し  
ておかないと、とんでもないものを取り  
落としてしまう。宝を無くしてしまうと  
いう現象がずいぶん出てくるんじゃない  
かなという気がするんです。合併前にそ  
れをしとかなないと、大きな区域になつた  
ときにガタガタになつちゃうと思ふん  
です。例えばセンターがそれを呼びかけて、  
宝の点検をしておく、そこから始まる  
ものがあるんじゃないかなという気がし  
ます。

讃岐 どこが誇れるかとか、どこに問題  
があるかということ子ども達は知らん  
のだから、学校の教科の中に入れ込ま  
ないと。

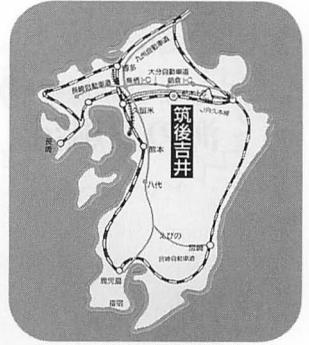
それが、昔のことだけするんじゃない  
て、やり方はいろいろあると思ふん  
ですけどね。もう一回、我が町を見直して  
いかないと。

事務局 どうも長時間、ありがとうござ  
いました。

(これは二月十九日、センター会議室で開  
催された、「まちづくり委員会」での内容  
を要約して掲載したものです。)



# キラリ 光るまち



「訪れる人に安らぎを、  
去りゆく人に幸せを」

筑後吉井の小さな美術館めぐり実行委員会  
事務局長 山崎 昇三

づくりを推進しています。  
住民参加のまちづくりは、昭和六十三年竹下内閣の時に、国から出された「ふるさと創生（一億円）事業」から芽生えてきました。  
同事業の交付金活用について、広く町民の意見やアイデアを反映させるため、

私の住んでい  
る吉井町は、福  
岡都市圏市民の  
憩いの奥座敷と  
自称しています。  
本町は、福岡市  
から東南へ六十  
キロ、浮羽郡の  
中央に位置して  
います。  
北は筑後川に  
接し、南は耳納  
連山を望む山紫  
水明な田舎町で  
す。  
まちづくりの  
目標に「みどり  
と清流、未来を  
ひらく希望の故  
郷」を掲げ、住  
民参加型のまち

平成元年に「ふるさと創生懇談会」  
（百人委員会）を結成しました。そこ  
で考え出されたのが、住民のまちづ  
くりを支援するための、吉井町ふる  
さと創生基金（二億円）設置条例  
（平成元年十二月）でした。  
毎年町ではこの基金を活用して、  
町民による自主的なまちづくり、及  
び人材育成を推進するための、「自  
ら考え自ら行う地域づくり」事業の  
推進を図っています。  
この事業は、町民団体やグルー  
プ（十人以上）が、自ら考え自ら行  
う个性的でユニークな「まちづくり事  
業・催し」を募集するものです。  
応募された「事業・催し」を、吉井町  
ふるさと創生事業審査委員会で審査し、  
採用された事業に対し事業費等を支援し  
ています。  
ふるさと創生事業のお陰で、次のよう  
な住民主導のまちづくり活動が生まれ  
てきました。  
町内には、豊後街道（国道二百十号）  
が東西に走っています。私は、平成二年  
のゴールデンウィークを地元で過しま  
した。本街道は車が渋滞しますが、交差  
点では赤信号待ち以外でブレーキを踏む  
車はほとんど見かけませんでした。

## いろいろな催し・イベント

- 4月 喜笠園牡丹祭り（120種1500株）  
蔵しっく通り名物お宝の市  
（主催：実行委員会／4月・6月・9月・11月開催）
- 5月3～5日 小さな美術館めぐり  
（主催：実行委員会）
- 11月 吉井しらかべ楽市楽座  
（主催：実行委員会）
- 2月15日～4月3日  
おひな様めぐり（主催：実行委員会）
- 3月第1土・日曜日 白壁市（主催：商工会）  
オールシーズン  
①句碑めぐり  
（芭蕉・漱石・虚子・年尾・汀子等）二十二碑  
②白壁土蔵の町並み散策  
（平成8年12月／国重要伝統的建造物群保存地区選定）  
③手打ちそば体験道場（ちくご手づくり村）  
④ちまき体験道場  
⑤古美術店めぐり（9店舗）

この車の流れの中から一台でもいいか  
ら、目的地に吉井町を選んでいただけな  
いだろうかと思つたのが「小さな美術館  
めぐり」のきっかけになりました。



## 筑後吉井の宝さがし

町を見直してみると、次のような宝(観光資源)がありました。

①屏峰と呼ばれる耳納連山と、美しい農村風景

②九州一の大河、筑後川と五庄屋川、それと温泉

③白壁土蔵造りの町並みと、心温かい町民

④故岡本太郎画伯を「原始絵画の真髄、古代人の美意識の爆発だ」と感嘆させた日の岡古墳・珍敷塚(めずらしづか)古墳などの装飾古墳

⑤絵画や陶芸等を楽しんでいる町民が多い。

このような「まちの宝」を、中でも白壁の町並み空間を活かす方法はないだろうかと思案してみました。

白壁の町並みを、まちづくりの「核」に進めている先進地はたくさんある中で、どのようにすれば「筑後吉井らしさ」を出せるのが課題でした。

この催しを企画する時に、特に注意したのは次のことでした。

①メンバーが、少なくともすむ(ひと)。



第10回小さな美術館めぐりを回る中学生達

②次回へ、つなぐことが出来ること。  
③費用が、少なくともすむこと。  
④雨で、中止にならないこと。

白壁の町並み空間を活かす方法は、都市の美術館で体験したことがヒントになりました。都市の美術館では、「制作者の顔が見えない、おしゃべりを楽しめない。」素人の私は、制作者の方に作品への思いを聞いてみたいと思いました。

都市型の美術館では味わえない、「制作者の顔が見える、言葉のキャッチボールが出来る」小さな美術館にしたいと。

### 「物好き一人では何もできない」

しかし、物好きの私一人では何もできませんので、次の方に思いを聞いていただき、準備会を立ち上げていきました。

### 「準備会のメンバー」

- ①古美術愛好家(薬剤師)
- ②美術愛好家(バラ栽培農家)
- ③画家
- ④パイロット(JAS)
- ⑤物好き(私)

### 「皆様のお陰」

お陰様で、平成三年五月

三日～五日は農村景観と白壁の町並み空間を活かした筑後吉井らしい二十か所の小さな美術館(土蔵や寺の本堂等)ができました。

当日は、天候にも恵まれた三日間で、北は東京、南は鹿児島から約八千人の皆様が鑑賞していただきました。

フィナーレの折には、実行委員の方から「来年もやろうね」という言葉を聞くことができ、嬉しく思いました。

### 「目標をいつまでに」

『平成二十三年には、年間交流人口百万人』を目標に、今後とも「文化の薫る心豊かなまちづくり」を目指していきたいと思います。

農村景観や白壁土蔵の町並みを背景に、メンバーが、そして町民が楽しんでできる「筑後吉井の小さな美術館めぐり」を開催します。

そして、今後も「訪れる人に安らぎを、去りゆく人に幸せを」を合い言葉に宝探しを続け、筑後吉井にしかない文化を仲間と共に作り出したいと思っています。

今年も、五月三日(木)～五日(土)の三日間、第十一回筑後吉井の小さな美術館めぐりを開催いたしますので、筑後吉井の文化をお楽しみください。

## 論談-まちづくり-

### 「ソフトのまちづくり」

長野県飯田市教育委員会スポーツ課

高橋 寛 治

#### 1、はじめに

各地のまちづくりを見ていて「まちづくりはソフトと言われるが、ハードに収斂するのではないか・」と感じるようになり、そのことを『舞たうん』へ載

もっと  
知りたい

せていただいた事があります。それはシンポジウムやイベント、それに視察などに行っ

ても、「論議が空回りしている」「三回続けたら、つかれちゃった」「いくらしても、街は変わらん」などの声が各地で聞かれるためでした。

今回は、私の周辺で始まっている、「体験学習習法」を活用して市民の皆さんが学校と関わる活動を通して、今後のまちづくりへ取り入れるべき技術について考えたいと思います。

#### 2、体験学習習法の始まり

ことの始まりは平成十年に遡ります。

この年からスポーツ振興の一つとして子どもを対象とした野外活動が始まりました。参加者は小学校の四年生から中学生を対象として公募、この時に生まれた子どもたちのグループを「わんぱく冒険隊」と呼びました。野外での生活体験やネイチャーゲームなどを続ける中で、今年は農地を借りて米づくりやイモ掘りに汗を流す事につながり、野外活動の究極の素材は農業にあるのではないかと改めて感じました。

#### 3、「あそびすと講座」の始まり

今回の体験学習は、野外活動に関心の高い市民（「わんぱく冒険隊サポーター」と呼びます）へ事業を委託することによって動き出しました。しかし途中から、このサポーターの皆さんの技術向上が必要となり、十一年度より研修を目的とした「あそびすと講座」が始まりました。その



田植え体験



あそびすと講座のふり返り作業

時に習得する技術としては「プロジェクト・アドベンチャー」（以後PA）を活用してきましたが、この春からは「あそびすと講座」に参加した市民が、学校が抱えている「生きる力」や「ゆとり」の取り組みを支援することとなり、市民が学校へ出向き、先生の授業のサポーターとして活動する事になりました。

#### 4、なぜ「プロジェクト・

アドベンチャー」か？

1960年代にアメリカでは、教育団体より「これからは、どの学校も『自己概念の教育』を十分考えていくべきである」との指摘を受け、このことを正面から受けとめる教育システムの一つとして「PA」を取り入れる学校が広がってきました。

自己概念は頭の中で作られた自己への概念ですから、私たちには「自分は不器用だ」「几帳面な人間だ」とか「異性にもてない」と思うなど、いろいろな概念を内在していま

す。しかし、これは概念だけに、実際とは違っていたり否定的な面ばかりが形成されてしまうことが多く、かつ、私達は自己防衛をするので、この概念を変えたいがらないものです。たまに出来ないと思っていたことが出来ても「マグレ」だ「例外」だと考え、記憶に残らないことが多いものです。

具体的に「PA」を活用した学校への提案は①生徒自身が新しい情報を消化し、複雑な問題を解決していくこと。②自身自身を表現し、他の生徒のニーズや異なる考え方を理解し、多様な方法を使って、効果的にコミュニケーションをとっていくこと。③これらに対して、ある程度高い基準を設定し、自らが目標を達成していくことを取り組むこととし、クラスの中での仲間づくり活動から、振り返りを重ねて自己概念の開放に取り組むこととなりました。

## 5、日本の自己概念の教育

日本では昔から「家庭」や「地域」がいろいろな場面でこの役割を担ってきた。このことについて民俗学を拓いた柳田国男は、教訓話の仕方が日本の常民社会にあり、「共同体の中で、共同と個を考えるとよく理解が出来る」と言っ



わんぼく冒険隊「

います。例えば柳田には『笑の本願』と言

う名著がありますが、その中で日本人の笑いはどこから生まれて、どのような働きをしてきたかを述べています。具体的には夜の仕事に見られる笑いです。これは辛い眠い作業のため笑い話を蓄え、皆で話しをする知恵でした。もう一つは笑い話しをしながら、「私も気をつけなくてはいけない」「戒めなくてはいけない」を、共同体の中でそれとなく知ってゆく話で、これは常民の伝承教育と言えます。話すことによってアハハと笑いながら、気を付けないといけないことに気付く、それは他人の悪口を言うだけでなく自分も改めて気付く、また、そのことで言われた人も深く傷が付かない、日本社会の中にはそのような教育的な仕組みがあったと述べています。

また、同じく柳田の『民謡覚書』の中では、仕事唄や田植え唄はつらい仕事を少しでも和やかにするために生まれたといっています。この民謡の始まりとなる仕事唄は労働の統一のために唄うものであり、ちぐはぐになれば皆が疲れるだけ

です。たとえば家を作るときの地付き唄などを一緒にしないと力が揃わない。そのため仕事唄が発生、もう一つは歌を唄うことによって辛さを少しでもやわらげる、そのような機能や働きを仕事唄は持っていました。

## 6、まとめ

日本の「家」が崩れ、私たちが身近なところで行ってきた「自己概念の教育」が家庭や地域では出来にくくなっています。「歴史は我々の共通の過去」と言われますが、今日の歴史を作っているのは私たちが、当面は将来に向かって輸入の技術を活用することになるかもしれない、私たちが固有に持ってきたもの、これら見えなくなつたものを形にしてゆくエネルギーを大切にして、市民の皆さんの夢を広げるために協働していくことが大切と考えています。

柳田国男は「過去を学ぶことは、未来を予見することである」と言っています。また、体験学習の原則は「見ただけでは忘れ、聞いたものは覚えて、自分でやったことは理解する」と言われます。常に飯田に学び、また自から体験することが、市民の皆さんと新しい関係を作り上げる原則ではないでしょうか。

高橋寛治さんは4月1日付で、産業経済部長にられました。

# “MY TOWN,,らおっちゃんぐ”

## 歩キ目デス&足ラテス

第15弾

### 「三瓶町蔵貫編」

岡崎 直司



宇和海に面した三瓶町に蔵貫という所がある。ここがチョイト面白い。まず、海側に蔵貫浦、そして山側に蔵貫村と分かれている。少し風変わりな地名は人の名からきていて、その昔、蔵貫(ぞうかん)というお坊さんが棲んでいたという。宇和町と境を接する背面の山の中腹には、

かの行基菩薩が修行をしたという極山薬師という聖地もある。リアス式の宇和海沿いにある集落としては、山に向けて少しばかりの平地も広がり、何やら仙境めいた里である。(写真①)

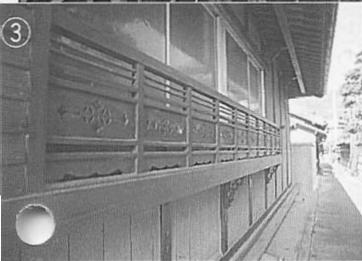
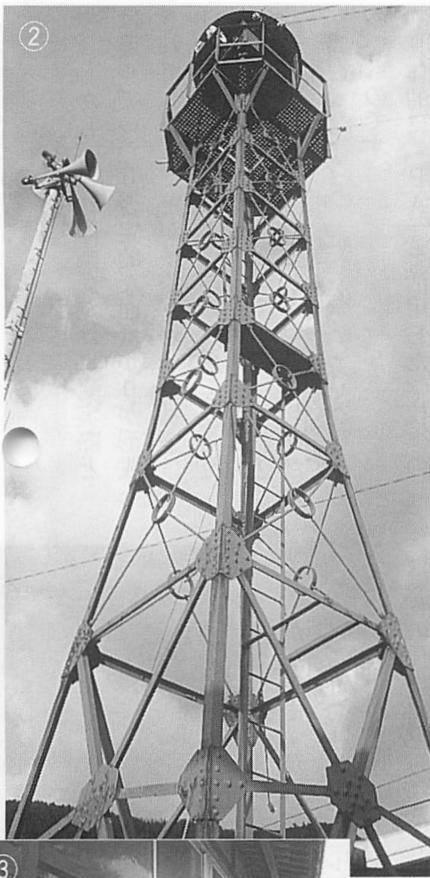
さて、ウォッチングの開始としよう。まず、海岸線である国道378号線を南下し蔵貫浦へ入ってゆくと、いやでも目に付く物がある。赤い火の見櫓。(写真②)これが目に入らないようだと、この先ウォッチャーとしては覚束ない。しかし、思えばこうした火の見も、現代ではもはや絶滅危惧種に入ったと言っている。携帯やら何やらの通信手段の激変と、建物の高層化により、都市部ではいずこも撤去激減中。日の目を見ない火の見つて所か。されど、この蔵貫浦では、この高さであればまだ充分機能しそうだ。移築ながら戦前期のものらしいので、大切に

て欲しいものだ。

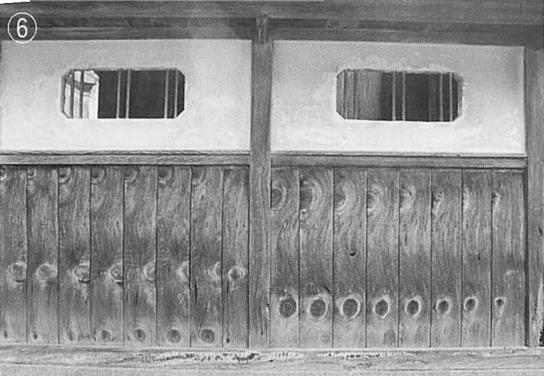
ここから少し集落の中に入って行く。道が狭いこともあるが、ウォッチングは当然「歩き」が王道です。早速小粋なつくりの手摺りが迎えてくれた。それを支える持ち送りの細工も手抜き無し。なかなかの職人芸。(写真③)

こちらは、昔旅籠(はたご)だったという建物の妻に施された鏝絵。何だか得体の知れない動物のようだが、虎でありましょう。こうしたへたウマなデザインほど味があって愛着が湧くということもんです。(写真④)

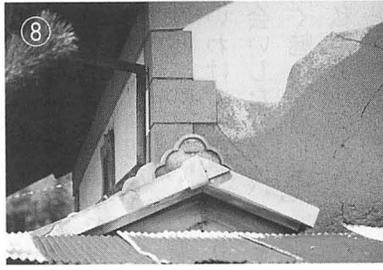
少し通りを行くと、洋風建築がありました。今はもうとっくにやっつけないようだが、下見板張りのレトロな郵便局。正面二階、窓飾りのアーチ部分には、郵便マークの「〒」が



海べり(上)が蔵貫浦  
山側(下)が蔵貫村



旭日風にあしら  
つてある。例の  
総務省管轄とな  
った郵政省のル  
ーツである、通  
信省の「テ」で  
ある。(写真⑤)



その丁度向か  
いにある塀の付  
まいも捨て難  
い。板張りをよ  
く見ると、意図  
的に節のある個  
所を並べてリス  
ミカルに見せて  
いる。こうした  
場合、穴のあく  
死に節ではなく、枝打ち  
の施された生き節の木が  
用いられる。用材を吟味  
して入念に仕上げたのだ  
らう。

(写真⑥)

もう少し民家にはさま  
れた小道を奥へ入ってゆ  
くと、今度は戸袋の続く  
通りだった。紅殻(べん  
がら)塗りの戸袋が、2

棟の民家に3つず  
つ、几帳面に並ん  
でいる。(写真⑦)



④

戸袋は、雨戸を入  
れる為の箱状のし  
つらえだが、これ  
とて死語になりつ  
つあるシロモノ。  
若い人に試しに聞いてみるといい。意外  
に知らない人が多い。かくして時代はド  
ンドン進んでゆく。  
やがて、袖壁のある大きな二階家の前  
にきた。かつて養蚕をやったという上  
杉家である。従っ  
て、ここの鏝絵は  
注目ブッケン。そ  
の袖壁の裏と表に  
それぞれ蚕の繭と  
雲龍が塗り込まれ  
ている。特に鏝絵  
の蚕バージョンは  
県内で二点のみ、  
共にここ蔵貫にあ  
る。一時期、地域  
を支えた養蚕業に  
対する庶民感覚が  
伝わってくる。  
近くの本田家の



⑦

土蔵も侮れない。洗い出しのコーナース  
トーン付き擬洋風土蔵。西洋の石造建築  
を真似て、角石の在りようを意匠的に見  
せている。しかるに、なまこ壁や打ち出  
の小槌、メ飾りの鏝絵をもあしらう和風  
の懲りよう。ナンノコッチャと言いたく  
なるが、その賑やかさも左官の腕の良さ  
で品が良い。(写真⑧)

まだまだ出てくる蔵貫の逸品たち。も  
うキリがありません。残念ながらの紙面  
終了。ヒューマンスケールの程よい集落  
“蔵貫浦”。この町のそこかしこに豊か  
さが溢れている。

押しかけ連載も回を重ねて3回目となりました。今回は加工室編です。

### 本題の前に

前回の「ショップ編」を書き終えてから今日までの間に、あちこちへお伺いしているいろいろな方とお話する機会が沢山あって、ちよつと元気がありません……。日本全国様々などころでまちづくりが行われ、成功した例なんかをお聴きすると、「私はまだまだだなあ」と思い知らされます。アドバイザーあるいはコンサルタントと呼ばれる方々はさすがに専門家ですから、理論的で説得力もあって、仕上げ方も適切だと思えました。もちろんすべてのそういった職業の方が素晴らしいわけではないかもしれませんが、今回お会いした方々は、ことごとく皆素晴らしい魅力的でした。吉海町に必要なのは、私のような素人ではなく専門家なのではないか……と珍しく弱気になってしまっただけです。

専門家による「ワークショップ」というものを体験してきました。「ワークショップをとことん重ねることによって、住民の総意、あるいは進むべき方向性が見えてくる。」とのことでした。そのとおりだと思えました。しまなみ海道が開通す

るに合わせて、多くの施設が誕生し、今も造り続けられています。一体どれだけの施設がきちんと住民の総意、進むべき方向性を汲み取ることが出来たのでしょうか。書き添えておきますが、「総意」と言うのは、一個人が無理やり引っ張った多数決による総意のことでは有りません。もちろん、沢山の選択肢、情報、置かれている状況等をわかりやすく提示し、正しく理解してもらった上でのもあります。まず必要だったのはなんだったのか……と考えると焦燥感にかられます。そうこうしている間に、バレンタインデーがあったり、ホワイトデーがあったり、強力なスタッフが結婚退職してしまったりで気がつけば3月。観光旅行のお客様もそろそろ動き出しました。また、あの恐怖の繁忙期がやってくるのでした。

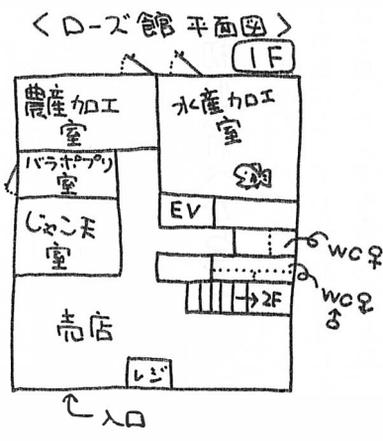


山口真佐美

### さて本題、加工室をどうしよう……

本題の加工室のお話に入ります。ローズ館には水産加工室、農産加工室、じゃこ天室、バラポプリ加工室の4つの部屋が有り、それぞれに流し台があったり、必要に応じて冷凍庫や冷蔵庫があったり、棚があったり、テーブルとイスがあったりしています。冷暖房完備、お湯も出ます。ガスも使用できます。動力も入っています。それぞれに出口や窓もあって、一見使い勝手が良さそうなのですが、これが実に狭い。ローズ館が誇るバラリースはバラポプリ加工室で製作するのですが、二人並んで作業するだけでもう女工





哀史の世界になってしまいます。流し台も一般家庭に比べると遥かに大きいのですが、何かを加工しようとすると小さすぎるのです。一気に施設を作るのは難しいですね。不都合がいっぱいです。特に新しいことを始める場合、実際に動き出して見ないと解らないことが沢山ありますから、出来れば最初はプレハブみたいなところで実験して、本当に必要なものを見極めて、機械なんかと同じ機械を実際に他所で使用させてもらって、比較検討してそれから着工すべきではないかと思うわけです。国の補助金の出し方に問題があるのでしょうか？申請する側に問題があるのでしょうか？事実、稼働していない加工室を持つ施設は沢山ありますよね？加工室が存在するからには何とか稼働させなくてはと思うのですが苦戦し

## 「ローズ館」奮闘記

～加工室編～



(有)伊予大島  
ローズ館  
館長

ています。私は加工品の専門家ではないのでどうしても低い位置からのスタートになります。間違いもあるし、時間もかかるし、よく解っていません。失敗ばかりしています。

おいしいバラのジャムを作りあげて、さあ本格的に販売と思ったら、無農薬のバラの価格が跳ね上がり断念したこともあります。干物乾燥機で鰯の干物を作り、得意げにレストランで出したら「魚は良いが、加工は下手だね。」と専門家の方に言われてしまい、「ローマは一日にしてならず。」の意味を噛み締めてしまったこともあります。一つ一つが初体験で、発見です。その積み重ねで何時かいいものが出来ればと思うのですが、繁忙期が来ると、ローズ館の表側が忙しく、手が回りません。

漁協の婦人が作るじゃこ天は、作り



つづけて丸二年になります。さまざまな失敗を乗り越えてたくましくなりました。突発的にどろどろのじゃこ天（固まらないのです）が出来てしまったり、人手不足に泣かされたり、今でもいろいろありますが、良く頑張ったなあとは思っています。彼女達が目指しているのは「さめてもおいしいじゃこ天」。揚げたてのおいしさが持続すれば「輝けお土産第一位」は間違いないのですが…。

というわけで今回は、奮闘記ではなく反省記になってしまいました。次回、「企画観光プロジェクト編」では元気に復活している予定です。5月にはバラがまた満開になりますよ。





研究員レポート

## 回思、この一年

研究員 森田 浩二

年度末にはその一年を多少なりとも振り返ってはきたが、特に今年度は自分にとって大きな環境の変化もあり、まさしくあつという間の一年だったので、振り返りながら、何をみて何を感じ、今から何をしなくてはいけないんだろうと思いを巡らせている。

### 「初心忘れべからず」

言い旧されてはいるが、この言葉ほど、今年の私にとって心にとどめておかなければと思つた言葉もない。それは、自分

への戒めとして。

役所に入る時は、誰もが、地域のために何ができるか、住民のために何ができるか、住みやすい地域にする為何をしなければならぬか、何ができるのか、住民のくらしのお手伝いをするのが役所で働くことだろうと自分に投げかけ、夢をふくらませていくはずである。少なくとも採用の面接の時など、役所で働きたい理由を問われれば、「ふるさとで働いて、住民・地域の為に、何か役に立ちたい。」という言葉が何の抵抗もなくすーつと出るのである。少し未熟ではあるが、それはかつこよく見せるためでも、うそや偽善でもなく、本当に心からそう思っているのだ。それが、いつからか一年も経たないうちに―それを言うことが気恥ずかしくなったり、思いが弱くなったり、忘れてしまつてしまふ。いや、その意味を深く正面から考えようといふというのがあつていられるのかもしれない。事実私は、そうだった。

事業の補助金をもらうことこそが仕事



早春の風物詩

だと思つていなかったか。それが住民のためになつていふと思ひ上がったか。待つていふ仕事になつていふか。「条例でこう書いてあるからできません。」といふ条例にかこつけてばかりいなかったか。ただ、給料をもらいに行つてないか。一番安全な場所として、役所にしがみついていないか。思い返せば反省し、後悔することがいくらでも出てくる。内子町の岡田文淑氏は「役所の職員は、公務員労働者として、その住民に生涯賃金二億〜三億円で青田買ひされて四十年後には実りのある稲穂（労働成果）を収穫できるであろうといふことが前提にあります。だから労働の対価として住民に何が提供できるかです。毎日遅れず、休まず、八時間きちんと勤め上げただけでいいんですか。」と鋭く問ひかけられる。



残さなければ…。目に見えるものだけでなく

### 津島町でのフォーラムで

去る二月十一日、地元での「まちづく



津島町まちづくりフォーラムの一コマ

今まで耳にしたことのない住民の意見もきける機会だと期待した。実質初めての試みであったので、現状

りフォーラム」に参加した。早春のしらうお漁などで少しづつメディアにとりあげられることで、地域のことを意識し始めた津島町。コップを内と外からと磨くように、内から風をおこし、外からの風も感じながらまちづくりを話し合おうと、一部は双海町の若松進一氏をコーディネーターに町内の方をパネラーとして、それぞれ現在の活動状況や町に関して思っていることや提案などの発表、二部は県内各地の活動家の方からの津島町へのメッセージをいただくといった内容であった。センターに来て一年間、たくさんの方たちを見た。たくさんの方にも参加させてもらった。自分のまちでどんなフォーラムになるのか楽しみだったし、

の認識と、この町もいろんな切り口でまちをおこしていけることの確認に留まり、具体的なテーマを探るところまでたどり着かず終わってしまった印象だが、参加した町民の反応もよく、自分たちで何とかしよう、そろそろ何か始めなくてはといった気運が感じられるものだった。

現在、津島町では、温泉の活用も含め、たくさんの方の課題・難題を抱えている。多分にもれずといった状況だけに、いろんな場所・いろんな形・いろんな規模で、本音で語り合えるような話し合いの場を住民自らがつくれるように、仕向けていくことこそ、我々役所の職員がまずしなければならないことなんじゃないか、そのためにはじめの一步として、きっかけがつけられたとしたんじゃないか。いやきっかけとしなければいけないと思う。今まで余りにも住民と役場、または住民同士が、話し合っただけのだから。



岩松川のしらうお漁

## 自分自身のまちづくり元年

大きいことや効率性のみを良しとしてきた今までの価値観が続くとは思えない。しかし市町村合併の大きなうねりが地域を飲み込む。その中で、今掘り起こしてなければ埋まったままになってしまう地域資源。自分たちのルーツや残しておかなければならない物・技術がそこにある。「地域で住む」という命題に向かつて、「造る」より「創り直すこと」また「残すこと」こそ大切で、そのためにしなければならないことが山ほどあることに気付いた一年間であった。

今、私が役所というしがらみから少し距離をおいているから、反省も後悔もできるのだ。しかし、役所にかえり、自分の現場に帰った時、同じ轍を踏まないようにしよう。そんな奇麗事ではないことぐらい知っているつもりだが、何か始めなければ変れない。いままでのようなごまかしだけでは役所に勤めていられない。そして、眠っている地域は生半可ことでは目を覚まさないことも肝に銘じている。この一年がローカルに生きるための自分自身のまちづくり元年だったといえるように、今後、より実践的な学びをしていきたい。



## 研究員レポート

# 「交流」の大切さを学ぶ ～九州ツーリズム大学～

研究員 橋岡 勝一

まちセンに来てから、早いものでもう一年がたちました。この一年間で一番感じたのが、まちづくりには人と人とのつながり、「交流」が大切だということです。特に昨年九月と今年二、三月に参加した九州ツーリズム大学で、それを痛感しました。

九州ツーリズム大学は、ツーリズムを担う人づくりや実践していく基盤の整備などを目的として、平成九年に熊本県小国町の「学びやの里・木魂館」をキャンパスに開校されました。今年度で四期目

になります。

## 「学習」と「交流」の町 熊本県小国町

熊本県小国町は、世界的にも有名な細菌学者の北里柴三郎博士が生まれたところです。北里博士は、地域での人材育成には「学習」と「交流」が大切であると唱え、小国へ勉学のための図書を寄贈し、交流のための貴賓館を創設しました。

この博士の理念は、小国町が推進する歴史・自然や小国杉などの地場資源の活用によるまちづくり「悠木の里づくり」につながり、地元の人に「自分たちの地域の将来は自分たちで考え行動し創る」という意識を育てました。そして、「学習」



九州ツーリズム大学のキャンパス  
熊本県小国町「学びやの里・木魂館」



小国町内をウォッチング

町内にアトリエを持つ旅の詩人 須永博士氏の作品を集めた極楽羅漢美術館で。

と「交流」の拠点となる「学びやの里・木魂館」を完成させ、将来に目を向けた地域と人を創り出すために「交流」への取り組みを積極的に行っています。そこから九州ツーリズム大学が生まれました。ツーリズム大学に参加し小国町にやって来てまず思ったのが、木魂館の江藤訓重館長をはじめとするツーリズム大学事務局、役場の方々の気さくさでした。そして、ツーリズム大学学長でもある宮崎暢俊小国町長の「地域の住民とともにまちづくりをして来た。各個人にもまちの進むべき方向を考えてもらった。住民が積極的な姿勢を持っていれば、意見がどっちに転ぶか分からず面白い。地域を開放していくのは難しいが、交流を大切に



◀OYO女性交流バザール  
食・環境・子育てなどについて、  
各女性グループが交流。  
あそびうたコンサートもあった。

したことで、他地域の人や団体とのつながりができ、新しい産業もできて来ている。これからのまちづくりは人の交流の発展と情報革命である」との話に、小国町の人を育てる、よその人を受け入れる、交流を大切にする気質を感じました。

### 自分の歴史を話す

二月の講義では、大分県湯布院町でツーリズムと観光についての講義、実習がありました。OYO（大分県大山町・湯布院町・小国町の地域連携ネットワーク）女性グループの交流バザールに参加して、小国産黒豚を使ったシューマイや串カツなどを自分たちで作り来場者に提供したり、湯布院町内の旅館で接遇の体験をしました。

特に旅館の接遇体験では、短い時間で

したが、私の人生の中で泊まることはないかもしれない亀の井別荘で、お客様のお迎えとお部屋までの荷物持ちをさせていただきました。また、フロント・接客係・調理場のミーティングを見学し、当日のお客様がどんな方か、食べ物の好き嫌いなどの報告を聴くこと

もできました。一流旅館のお客様を第一に考えたもてなしの心をほんの少しでも実感できたことは大きな収穫です。

この後、湯布院のまちづくり仕掛人中谷健太郎氏から、ご自身が持つてこられた蓄音機から流れる戦前戦中のレコードを聴きながらの講義がありました。「よそから来ていただいて楽しい思いをしてもらうには、それぞれの人が抱えている歴史を話すことだと思ふ。口先だけでない、本で読んだことでない、自分の歴史を話せば感動してくれる。自分のひとつひとつの思い出を人に話せるか、紡げるかが大切だ」と話されました。レコードを聴きながらその当時の中谷氏の思い出話を聴くと、私の知らない時代の話ですが、自然と引き込まれていきました。これが人と人との交流には必要なことなんだと思います。そのためにもいろいろな経験、実践が必要だと分かりました。

### 交流で自分を見つめ直す

今回のツーリズム大学にも、全国各地から会社員や公務員、農業、主婦などいろいろな業種の方がこられ、二十代から六十代と幅広い年齢層が集まっています。

私が参加したのは、「これからの農山村を考える上で、農山村と都市の方との交

流のあり方を勉強したい」からでした。同じような理由で参加された方もいましたが、「定年退職するので、田舎で農業をしたい」とか、「農山村に移住して、新しい仕事を考えている」など、これからの自分の生き方を探しに来た方もいます。

年間七回あった講座のうち三回しか参加できませんでしたが、みなさんそれぞれがこれまで経験してきたことや地域で実践されている話をお聞きして、異業種の方のお話を聞くことはあまりないのでとても新鮮で、新しい知識も得ることができ、視野が広がったと思います。そして、農山村と都市の交流でも必要なのは、お互いの暮らし、歴史を話すことじゃないかと感じました。こうした交流を重ねることで、地域に新しい経済も生まれるのではないかと思います。

また、自分自身を顧みて、自分の未熟さ、歴史の乏しさをつくづく思い知らされました。交流することは、自分を見つめ直すことにもつながります。

このツーリズム大学で一番得たものはそこで出会ったみなさんで、また何かの形で交流できたらと思います。まだ何を実践していくか考えている途中ですが、これからもいろいろな方との交流を通して、固めていこうと思っています。

二〇一〇年四月一日、「愛媛県」がなくなつた。そして、「四国州」が誕生した。

二〇世紀の最後になつて、地方分権一括法の施行にあわせてように急に噴き出した市町村合併の大合唱は、地方財政の逼迫が最大の要因であつた。国債、地方債あわせて残高が六六兆円という数字、地方交付税制度の現状維持の限界は、市町村の数が多すぎてムダが多いという結論に短絡された。

都道府県による合併推進要綱の策定後しばらくは様子眺めの観があつたが、二〇〇五年三月で期限が切れる合併特例法の延長は難しいという真しやかな噂が流れると、期限までになんとかしなくては財源が守れない、既得権益のパイを守ろうという動きが表面化して、リストラの対象となる議員や一部の職員の反対を押し切つた。

住民にとつては、「広域市」にならうと成るまいと、そんなに関心はなかつた。合併によつて生活がどう変わるのか、正直よくわからなかつた。それに愛着のあるのは昭和三〇年代の合併以前の旧村であり、お互いの顔を知っている、「地域」であつた。

市町村合併が進んで、「広域市」ができてくると、県なんていらないう議論が、当然のように出てきた。市町村の数が多いと、県レベルでの整理等が必要であつたが、それが一つの県で十前後になれば、もう少し大きな枠組みで、調整やまとめはしてもらつた方がよいということになつた。そこで、国の各省の地方出

先機関の管轄区域にはばあわせた「道州制」論議が再びおこつてきた。

四国の場合は、他のブロックと比べて、一番経済基盤が弱いので、中国ブロックと一緒にすべきという案や、関西圏とくつつけたらという案もあつたが、結局一つの州になつた。それは、引き取り手になかつたこともあるが、四国は一つというのが一番まとまりがよかつた。四国というアイデンティティを確立するうえで、四国へ入る道文化を世界遺産にしようという市民グループの運動も見逃せない。運動から十数年たつた今も、登録の夢は果たせていないが、四国のもつ地域資源の再発見、「癒しのくに四国」というイメージの定着など、それなりの成果をもたらしている。そして、登録基準が少し変わつて、来年当たりには吉報が届くのではないかという話もある。

地域の風景も変わった。高齢化は、い

### 研究員卒業レポート

『201X年』

前 主任研究員

藤田 享



やおうなく進み、耕作放棄されたかつての田畑には、草が生い茂り、山に入ろうにも道が見つからないという状態の地域も多く見られる。だが、ちゃんと手を打つていた地域もあつた。集落の一戸一戸の後継ぎの状況を把握し、現実的な集落の土地利用計画をたて、機械が使えるところは、地域にいる後継ぎや農業法人にまかせ、高齢者は野菜などをつくつて、近くの青空市で売つたり、都市のおなじみさんに宅配したりして、多少の現金収入を得て、生きがいをもつて暮らしている。誰でも受け入れる開かれた地域には、総合的学習の時間にやつてきた子供達が大きくなつても「ふるさと」として訪れたり、都会の生活に向かないと思つた人々が、廃屋を譲ってもらつて、田舎暮らしを始める人も増えた。その中には、芸術家やクリエイティブな仕事をする人も多かつたし、ある意味で「田舎が最先端」という地域もある。

市町村が、「広域市」になることで、一番不安視されたのは、福祉の問題であつたが、自分達の地域は自分達で守るという自覚に満ちた「市民」のいるところでは、地域通貨を使つたりして、お互いが遠慮なく助け合おうというシステムを自分達でつくつていった。それに介護保険の反省にたつて、医療・保健・福祉の一体化が本格的に進み、小さな町村時代には雇えなかつた専門スタッフも充実し、その拠点に小学校が使われるなど、桃源郷をつくりあげた地域もある。

## 金もない、知恵もない ならば、せめて汗をかこう

まちづくりセンターには、旧財団から通算して四年。“まちセン”で学んだことは多いが、一番は「地域に生きる」方の生の声を膝突き合わせて聞いたことだと思ふ。目線を単に下に向けるだけでなく、地域のことを知ろうと思えば現場に入らなければならないし、地域から学ぶことは多い。そして地域の抱える問題を解決する道筋を探ることが地域政策研究なのではないかと思ふ。

ところで、まちセンの顧客は誰であろう。まちづくりの活動をしていて何か困っている人、あるいは、まちづくりに興味を持っている人、あるいは、金がない人、あるいは、知恵を出せと言われるが、昨今の厳しい金利・経済情勢の中で、センターに金があるわけではないし、知恵、情報にしても、平均二年というローテーションで研究員が変わり、プロパリの専門スタッフがいない現況からすると、せいぜい一緒に学ぶのが精一杯というところである。ただ、まちセンの強みは、まちづくり実践者個人のネットワークである「えひめ地域づくり研究会」と、まさに車の両輪でやっていけることだと思ふ。だから、研究会の事務方として汗を流し、一緒に地域に入って、ともに勉強させてもらう。そして、地域と研究会あるいは大学の先生などのアドバイザーとをつなぐ役割を、まちセンが果たすことができると思ふ。

その媒体の一つとして『舞たうん』がある。地域で頑張っている人の思いを、県内はもと

より全国に発信したいという気持ちで編集に携わってきた。ファシリテーター的に、ローカルに生きることの素晴らしさを、何人かの人にも感じていただければと思つて。目標にしたのは『ジ・アース』という地域雑誌である。編集発行人であった忽那修徳さんの今年ももう七回忌ということであるが、ようやく創刊号から四十号最終号までバックナンバーを全部まちセンにそろえることができた。

\* \* \*

まちづくりの世界は、一度足を踏み入れたら、これほど面白いものはないし、本当に人を大切にしてくれる。小布施を訪れた時もそうだった。キーマンである小布施堂の市村次夫社長に、できればお会いして直接お話を伺いたいと思ひ、手紙を書き、電話をかけたところ、海外出張中とのことだった。ところが、夕方、小布施の宿に着くと、連絡をくださいとの伝言が。早速電話すると、時間をとっていただいでいて、スタッフのセーラ・カミングスさんと一緒に、話をさせていただいて。ではこれで…と思つたら、一緒に食事を楽しもうと誘われて。その後、遠来の客と地元の人が交流できるサロンのような場所をということのでつくられたというバーにも、ご案内いただいた。本当に一面識もない我々を、ここまで客人としてもてなしてくれるのかと感無量であった。

これだけではない。全くの飛び込みで入った足助町では、矢澤長介町長にも会わせても

らつて、その夜の企画課の親睦会にも加えていただいた。新潟・鳥取・綾：本当にいろんな所で「有り難きこと」を体験させてもらつた。

私も愛媛に人が来られた時に、自分なりのもてなす場所、見せたいところ、会わせたい人を持ちたいと努力はしているが、自分が受けたものからすれば、まだまだである。でも、センターを卒業しても、一人の人間としてつきあっていたら、今までの恩に少しでも報いたいと思つている。

まちづくりの実践と言つても、県職員の私には直接のフィールドがない。この四年間に両親を亡くした私にとって故郷も、ちょっと遠いものになつてしまった。新旧住民が入り混じつた自分の家の周りのコミュニティは、ちょっと手強すぎるし、とりあえず自分のできることはと言えば、えひめ地域づくり研究会の会員として、年次フォーラムなどに顔を出して、ちゃんと会費を払おう。そして、まちセンに来た年の仙遊寺でのフォーラムが起点である「四国へんろ道文化」世界遺産化の会にも、自分ができる範囲で関わりたい。先日の内海柏坂は体調をこわして行けなかったが、できるだけ昔ながらのへんろ道を歩いてみたいと思ふ。歩いて、汗をかいた先に、何か見えてくるものがあるかもしれない。誰かのためにならなくとも「育自」のために。

—二〇〇一・三・三一まちセン卒業の日—

# Information まちセンからのお知らせ

自分を、地域を見つめなおすためにあなたも参加しませんか!

## 地域づくりリーダー育成研修生 募集

☆県下各地から研修生を募り、自主的・実践的な研修を通じて、将来地域のリーダーとなるべき「人」が育つことを目指します。

☆参加者同士はもちろんのこと、アドバイザー・センター関係者を含め、将来に渡る幅広いネットワークの構築を目指します。

### ■研修期間

概ね1～2か月に一回のペースで、先進地研修を含めて延べ8日程度を予定しています。

### ■研修内容

○宿泊を伴う研修をなるべく多く取り入れて、効果的な研修を目指します。

○地域づくり実践者などのアドバイザーを招いたり、現地研修を行い、より実践的な研修にする予定です。

### ■募集人数および応募資格

○15人程度

○地域課題に主体的に取り組む意欲のある人で、気持ちが青春していれば年齢は問いません。

昨年は県下各地から15人の方たちが5回、延べ8日間の研修を行いました。

職種、年齢、性別もさまざまな人が集まり、意欲的で和気あいあいとした研修が出来たと思います。

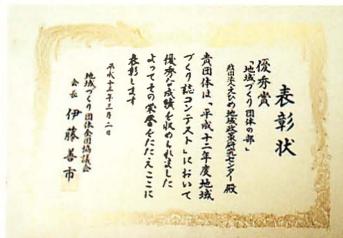
この研修にぜひあなたもご参加ください。

### ■申し込み・問い合わせ先

下段に書いておりますえひめ地域政策研究センターまでお問い合わせください。

## 春です。出会いと別れの季節です。

平成13年度 えひめ地域政策研究センター まちづくり活動部門は、次のスタッフで活動します。(☆は新しいスタッフです)



平成12年度「地域づくり情報誌コンテンツ地域づくり団体の部」で、舞たうんが他の3誌とともに優秀賞を受賞しました。



後列左から  
 研究員 森田浩二 (津島町) 研究員 三好誠子 (三瓶町) 事務員 西村寛子 研究員 橋岡勝一 (県農えひめ)  
 前列左から  
 主任研究員 ☆山下大成 (愛媛県) 専務・所長 三木秀文 常務・統括部長 茂木雲一郎 (日本政策投資銀行)



藤田 亨

4年間主任研究員として勤務された藤田さんが、愛媛県庁へ帰られました。

これからも客員研究員として、よろしくお願いいたします。

印刷／三創印刷株式会社

発行／平成十三年四月十日  
 (財)えひめ地域政策  
 研究センター

TEL089 (932) 7750  
 FAX089 (932) 7760  
 (財)えひめ地域政策研究センター  
 まちづくり活動部門  
 (まちづくりセンターえひめ)

〒790-0003  
 松山市三番町四丁目十番地一  
 愛媛県三番町ビル二階

\*\*\*\*\*  
 内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

この号から、アンケートの要望にもありましたとおり、表紙をカラーにしてみました。また段組、文字の大きさも変えてみましたがいかがでしょうか。是非感想をお寄せください。  
 早いもので、このセンターに来てからあつという間に一年が経ちました。私にとつては驚きと新たな発見、そして自己嫌悪(名前が覚えられない!)の日々でした。あと一年、好奇心と探究心を忘れずにいきたいものと改めて感じています。  
 (三好)